通信全覽二編

類輯六十九

百六十一

共百六十九

内閣文庫
和書

内閣文庫		
番號	和	33005
册數	303	(278)
函號	184	271

(共278)

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

九番

秘閣圖書之章

日本政府圖書

類輯巻之六十九

不開港繋泊
続刊之上

申
正月廿九日到達

亜墨利加合衆国全権第三十九

エキセルレンシー

トウンセントハルリス江

以書翰申入候外国之船之我国近海通航
いたし候船破船およひ不得已之事有之節ハ
格別何之謂も無之開港場之外他之津

内閣文庫

港に碇泊して船艦酒積するに於ては許さゞる不
都合にて勿論此行掛りに継續も不生哉と難計
無之といへとも我等は尚貴國の人民に
兼而示諭し就而は猶以て此段申達候

安政七年申正月廿九日

脇坂中務大輔

安藤對馬守

申
二月十三日達
誠

第八号

千八百六十年第二月十三日江戸合衆國使臣より

外國事務宰相等に

脇坂中務大輔

安藤對馬守

閣下に呈す

余日本の未た開かざる諸港に止むを得ざる
場合の外は亞米利加船の入来らざることを知せ
しむる所の布告書を落手せるを告く

且商船ニ於ても甚た可なり猶又貿易する
国人の習俗を親睦せる国々の軍艦ハ之を能く
其国の各港ニ入来せるを許し其港商船の
為ニ開けたると開かさるとを論せす軍艦を実
ニ厳令ニ従ふものにして決して交易を行
はさるものなれハ来往の人々ニ能く愛行の
路ありし
親睦せる国々の軍艦皆国の港内ニ艤装する
理なると雖も既に合衆国方々存在せる好情

を厳ニ壊り隣誼を示さゝるなし
條約規定ニ基き亜米利加ニおゐては日本国内
故障なく旅行せる理なり猶又合衆国
亜米利加軍艦を日本の未た開かさる諸港
ニ航せしむるところハこゝろよくニ於ても在港を探
求ることなし
余謂く合衆国事件を熟考せしにおける後
此商船のことに行ふこと毛も有害を及さゝる
年　路理敬白

トウンセントハルリス　手記

ヒユースケン　正訳

三十番

申
四月十四日到

亜墨利加合衆国全権ミニストル

エキセルレンシー

トウンセントハルリス　江

貴国第二月廿七日附第十八号之書翰落手致候
先般外国の船ニて開港場之外猥ニ繋泊致候
ざる様懇諭并告示せし處今其被官ニて
申越さるゝ條領事を経て其港内船ニ於
くる所有りと云へとも軍艦之厳令ニ従ふ事

来らハ行れざるとの由甚以本意善ニ通し
併来ニ随ひ此境先般我西北ニあたりて
何国ノ船ニ哉属候船ニて大ニ不都合を
生せし由申入たり漂溺之件ハ聞ニおよぶる
海岸ニ船を寄宿致させれを此境遠ニ
之様 程貴国之為民ニ論し一定之存且開
けざる他之津港ニ安ニ接待致せざる其他の
者共も素より不慣之事有自然不都合
之事有之候も知るべからざれハ猶附て貴国

於ても不快ニ思ふとのことなり別而親睦を害
するのことを恐るべくことに深く憂ふる事なれハ能
詳察せられ度も軍艦ニも其旨を通し置
右等答書如斯に候其詳宜

万延元年申四月十四日

脇坂中務大輔

安藤対馬守

申
四月廿四日元識

第弐八号

千八百六十年第六月十三日江戸在合衆国使
臣館ニ於て

外国事務宰相等ニ
脇坂中務大輔
安藤対馬守　各閣下ニ呈ス

余閣下の本月十四日に記せる書翰を落手せる
ことを告げ其書中にて閣下我に告て曰く

何れの国民ゟ知るべからざる者の船舶日本北
部の開かざる港に寄せんとして而して名義
に託ふに亜墨利加の船舶様なきを行ふ時
の外を開かざる港に尋問せざるべからざる由を
亜墨利加の船舶に告知せしむべき上書を以ては
亜米利加の為船を諸其為に開港せる所なき
なきこと行る時の外を雖者り七隣家に
限ることとを知せしむ是故に上件を告知させんと
無用に属す金銭の船舶其事に於ては

互結びたる條約に違犯せることを思ひだし恐
惶頓首白

トウンセント ハルリス　手記
ハセイ ヒユースケン　正訳

八番

申正月廿九日達

貌利太尼亜全権ミニストル
エキセルレンシー
ルーセルホルトアールコック江

以書翰申入候外国之船を我国近海通航之
節ニ於て難船破船ニ而不得止之事ある時ハ
格別何の謂れもなく開港場之外他之津
港江揖入ニ相成場所ニ致シ候杯ニ而も許多ニ

不都合之無様如何様ニ茂撰ニ可
生為ル難計並ニ念入ニ付右様之儀
無之様ニ当国人民ニ兼而承知致させ
相済候様御取計可被成候

安政七年申正月廿五日　脇坂中務大輔

安藤對馬守

八番

申正月廿九日達

佛蘭西コンシユルゼネラール

ヱキセルレンシー

ドセニデベレクルト

以書翰申入候別而船ニ我国
近海通航之節右船破船及
ひ不帰之乗付る時ニ格別

何ニ而も有之候ハヽ最寄場所外他
之津湊ニ猥ニ碇泊致候由ニ付
ニ於ては不容易筋ニ付候ハヽ
而已ならす何様之浮説生し
候も難計、無念之到り
ニ付、右様之儀無之様其
人民共篤と申諭し置
様心得候様可被申達候
云々

安政七年申正月廿三日　脇坂中務大輔
安藤對馬守

第二

申二月七日於済海寺澤上総介殿佛蘭西コンシユルセ子ラールヘルクールゟ
對話之内

一　過日尾張殿屋敷ゟ出候者之儀ハ全ク外国之所
之儀ニ付御處置相成候ハヽ御書翰之儀ニ付出候ニ
可有之哉之節ハ法則之通ニ所置致候得共又候日
本出候処出候而狼藉之場合ニ付而ハ出
来候得共日本之事ハ申上候事も宜候

一　右者御挨拶も有之候ニ付出張之儀ニ付被為在間敷
一手元ニ

一 此書類中ニ於て船と認め有之候者軍艦を除之
候義
一 船之外者商船之名を申事ニ候得共軍艦たりとも
開港場ニ来り候ハヽ薪水食料等欠乏之品ニ而も差支
相渡し候儀ニ候
一 軍艦之規律等も都而其国之法則を以可申
之港ニ於て取締方之義者甚々之義ニ候
一 右之外ニ付候者等開港場ニ而外國人之規則
申付候者種々之事件之儀ニ而も相生し候ハヽ難計

候儀之有中入候儀ニ候
一 西洋各國之例ニ而軍艦者何連之港ニも
立入候而も子細無之事ニ候
一 船中之言語之違ニ付自然行違等も有之候而ハ掛念
いたし候ニ付右申立之通り書類其写を取
之有書面之法則及方委細承知いたし度候
一 只今申上候儀者コンシユルゼ子ラールニ而取究候儀
申上候儀ニ者無之英亜ミニストルとも法則
之上申上候儀ニ候

第五

申
六月廿日松平豊前守殿宅中務大輔殿対馬守殿英国ミニストル
アールコックより対話之内

一 過日之御書翰ニ而も不図港之場所ニ
外国船一切立寄候事ニ付長崎ニ而
之商船ニ乗りより候ニ付
以後其軍艦も右様之所ニ不参候ニ
申候之由ニ候

一 過日中大通之方之事ニ而も武之者ニ而中間
来ニ而雑破船来候之者者来候来候

不審船之事

一 異国船之儀ハ異国之軍船ニ候ハゝ
場所ニ寄可申候得共大抵ニ候ハゝ
此方之手当致候

一 右之通相見ニ候ハゝ船之所ニ而軍船ハ大
津ニ而ハ相違無之候得共船ニ而も是ヲ
長崎ニ寄候得共相違可有之候ニ付可申候
目付之所ニ而何れ之事ニ付候ハゝ

一 右之儀ニ付而ハ当書面之通可申上候

一 御国之者共異国船ニ候ハゝ御国之法
船ニ而者可有之候得共寄観之上可有
之旨ニ而可申候

一 右船之寄来り候所ニ而ハ無据よ
船之大筒を以打払可申候得共不及通ニ
無之ニ付右船を打払候而ハ可有之
不容易之儀ニ而可有御座候事ニ付
右之通可致候

一 右船之儀ハ何事ニ而も可相通候得共

届候筋ニ而ハ在留中月番より申出書籍
ニ而可申上候
一 此節右書面之通ニ而開港之場所ニ而異国雑
之船渡来日数并食料其外諸事右
代料書付差出船主船名其外記し候書
付差出も右場所ニ而差出候代料ニ而家
家開港場ニ而其掛り役人え申付有之
り候共右之儀相違之事申上候 雑事取扱候
条相済ニ而其通り候而御下知奉願事

路府ニ而引渡し可申旨ニ有之候
一 右之通之場所ニ而掛り之者役々心得方之哉
一 右之心得ニ而可然候
一 右之儀今右之三箇ニ而差上候共書面之通
十五ケ所ニも有之且右場所中之有之候
一 私共ニも精書面之通委細可申上候
一 心得申候

附考

附考

未六月廿四日下総守殿ヨリ下ケ

宗對馬守領分ニ英吉利船漂来仕候届出候儀ニ付書付

宗對馬守領分對州浦海浦内ヘ去月十七日辰中刻
比沖海内尾崎浦之内町余之所ヘ異様船碇泊
小艘ニ而数十六人ツヽ乗組近辺之浦添測量等

一
漁猟等ニ出見候得共無故上陸濱辺ニ立廻り
候得ハ村家ニ立入不申萬一右之通り帰船候
翌十八日右船為見分方役所ゟ右船ニ而相越候処
唐人共無紀居候ニ付致筆談候得共萬事相
分之船ニ而長崎表ゟ帰船ニ而當浦へ相越
候趣ニ而船将名ハ蓋彼姓ハ華奈集与申人揔
石弐拾人乗組日数百日滞船可致候申出且又
商賣之儀願之趣望之通見分之上筋之而承済
交易之可致産物無之ニ付致方相無申候

為食用白米牛鶏卵野菜等買調度段申出
候ニ付米手之儀ハ難懸段及返答候処是非
共交易合ニ而呉及懇願候ニ付白米弐俵牛壱疋
鶏四拾九羽鶏卵四百三拾五個野菜
五俵相与無之商賣ニ而ハ無之候所柄之義ニ付
代價之不及義申出候得共是非代物差遣度
候段達而洋銀弐拾九枚差出候ニ付不取止交
易候ニ付右銀之儀返候ニ相改申出候処異文
於異人見せ之碇船数艘之乗組所之ニ縄を下り

海深を量り或ひハ高山ニ登り四方を測
量いたし絵図ニ仕立又目印ニ為めとも可有之
又海岸ニ浮標之如き物を流し錨を入魚
類を見磯辺ニ而貝類を拾ひ野菜を摘見
鉄砲を携へ山野ニ而鳥獣を打留同廿日ニハ
貝餅村領一里沖合ニ而懸り候船より大砲
打鐵空砲拾発同廿二日ニハ本船より大砲
玉込ニ而発空砲拾九発打放候ハ右総体
之儀ニも無之候得共所ニ而波繰細々を押留候様

可相成儀ニ有之ニ付不急留置候所浦賀
湊為仕手ニ者且又退帆之儀も申達候処浦賀
之返答ニ不申候ニ付右海岸警衛之向ニ急
手当ニ及居候得共此様之動静ニ而可申哉候
従来許申越候節当時之義を以同人ゟ申来届
出候間此段申上候以上

未五月

岡部駿河守

書面之趣一覧勘弁仕候処右之外差遣る宗

對馬守被申届候ニ付評議仕候上以通辭被
船之外ニ而聞濟不申候場所ニより候ニ付
子細有之趣其段申聞候得共聞濟候
未退帆可申旨申聞候ニ付根之取計可致旨
申上候ニ付清河守申上候儀委細承知仕
可取計旨評議仕候通被仰渡候様仕度此段
申上候

未
七月

水野筑後守
村垣淡路守
堀織部正

宗對馬守領分ニ英吉利船滞留いたし
候旨届出候儀ニ付申上候書付

宗對馬守領分對州豊崎郡豊崎浦中処ニ英吉
利船壹艘去月十七日渡海同廿一日退帆いたし
去ル十七日夜中上陸いたし船より去月廿四日船将并
兼而上陸いたし候役人ニ而談判致候處唐人を以
申出候者用事有之ニ付此方之船ニ可承筋候旨

変之非礼ニ及候段中ゟ申付候其之急度
向之儀ニしてハ是ゟ差出大目付役田沼造酒之
旅宿ニ而相招兼而同日午之刻ゟ罷越候人余之
引払ニ而御申付候ニ付段急度上陸ニ付差出
旅宿構外之急度船将を始其外英人之亡人筆談
唐人を差添岸上ニ而通り申付造酒之筆談
役々人御目付出合申候筆談を以急度及
其求以後下通達致可申出外ニ相振候而不申
申候儀ニ田舎藩主酒肴差出申候様

食之様帰船いたし候ニ付造酒之筆談ニ而役之
彼船へ乗出し候処城下より差下し置候役人
者共不申中ゟ志着同郷士之由致應對置候旨
引續造酒之筆談ニ而船将ゟ来之為様子
彼船ゟ乗出し候處船将西洋饗應有之
唐人筆談を以此所之浦法ニ付出立之節
旅相成可致談来其節馬致足申来候處
中ゟ申付馬之儀ハ相對ニ而之雑申懸候處
表ゟ之向之許容不致候ニ付長崎へ可申渡

候追々及返着候ニ付同廿日船修理用ニ付
桟木相調度段唐人共儀役々ニ申出候ニ付　松
材木可被相与申ニ付同日あま村ゟ中宿へ館
船ニ腰掛付異人ニ差上候所ニ而出合処
御ふところゟ是ニ少々なる銀銭差投出無之
直ニ被帰船ニ付同廿八日薫ゟ異人ゟ銭類出
候ニ付遣酒代以下より相縮ニ候旨ニ付船将へ
生鶏ニ差上鶏　猪　羽　野菜一形　生物諸々投
鶏卵百余被唐人ニ生鶏ニ差上度相無之ニ付要

同日船将より遣酒代以下ニ銀銭拾弐金相渡ス、
ミせ拾八鎗大小共被差縮候ニ付被辞退ニ
帰ニ致ス雑品度ニ付　其儀ニ差免
不致ニ付差追々相願候所可仕旨ニ而帆ニ乗
退出帰候而ニ候定ニ而追々不申出候旨外
相度候段も無之候平穏ニ罷在候ニ付海岸
警衛向無急度手当無之候ニ付此段ニ而動静
追而可申越候得共許ゟ中越候旨当地ニ而
承合　同人家来届出候旨　此段申上候以上

未七月

関新駿河守

未七月廿二日　同下ケ

宗対馬守領分ニ英吉利船渡来之節書付

異人家来共江長根生外之儀等可申書付

宗対馬守領分対州海内尾崎浦ニ去
酉ト英吉利船壱艘当四月十七日渡来滞
船中ニ大米等追々申立中山委去船五月
八日出帆滞船中牛七疋鶏十羽鶏卵

当港呼寄候請取諸物之外ニも洋銀
并煙草雑物金物ほうん書画等押而
等所ニ持去り是又壱月廿七日宿次便
ニ而方より申立候ニ付鎮台ニ届出置候別紙
目録之通り国許より取寄候而
同人家来之者差出申候者も聊之品柄等
平億之請取候様ニ而国許よりも可有
之哉ニ付浮候ハ当港より茶舘ニ而取廻
外ニ壱艘薪水食料之請取退き之為ニ洋銀

平外之代り物を渡し相集候処右者ニ而
上ニ差置候場所ハ取締ニ而雑り面難害
其生可申哉ニ付去ル寅年五島行手当ニ
碇泊之無而已船々届候ハ遠眼鏡等
其役所ニ差出切ニ仕り根合を以可取斗
方ニ可有之哉ニ御保取民之儀御勘定
方相成ル取ニ手数諸雑費ニ相懸候義且ツ
洋銀通用ハ数御出置洋銀ニ而品々
取立之上ハ頼ニ而前ニ而郷之事ニ而洋銀ニ而五島

近江守殿同之者共亞米利加人参ゟ申候ハ
通商物之義者来ル四月中ゟ同所ニ而取扱ニ
有之候ハゝ右之振合を以於長崎會所入札
拂ニ取計 尤當方家来ゟ古代銀ニ而
御取計可仕哉

一 御開港場所外ニ而異船擢之碇泊仕候
もの彼方ゟ達可申候て取業ニ而當今迄神奈川
長崎下田箱館之外ニ而取扱不申候趣被申候ニ付
向後右振合を以取計可申哉之義

一 當地滞在之英吉利官吏ゟ申立候ハ
得共ハ右之通於御地同國ニ而右様之儀無之
候間何分致方無御座候

一 前書之家来ゟ別紙之通り口上書を以
在留中之振ニ同家より取扱振難相成
之事情有之候ニ付義務遠慮候通り御
元ニ外国人接待振之次第取計有
之事ニ付預メ規則ニ而立及同國之外
而々都而彼方不都合之様合出来可

殊ニ當時之儀ハ英船再渡来
致候付同國官長之者江可及直談旨
之趣英吉利國之者第一渡来いたし難
兼而申出来候節ハ同國官吏此地
滞留致居候ニ付此旨ニ而申談事ニ付被
官吏共ニ而達候方ニ可有之尤書面之趣ハ
江府表ニ而申上候間當港淡次第
可有之候得共當座取計中之事ニ付承知
候事ニ相成候而ハ同人ニ而差出書取を以

中和ニ条陸奥通商之事ニ付未成候ニ付
而ハ此上之柄朝鮮國江遣不成
ニ而ハ何事寛永以来条約之處同國ニ而ハ
御通信相成有之候得共不敷含ニ有之候様相成ニ而
第一當方朝鮮國ニ而差支方之儀於
其地第一當ニ於ゐて武
且又右之事情振合意得成
之様仕候
右之通ニ付何分別紙

口上書并写英船ゟ聴取之目録写差
之通其保証金三千両中浅生取扱上
写箱敷何面
差出ス

外国奉行江

別紙長崎奉行伺書ニ承付之通リ取計
小菅浮瀬意開港場所之外擱ニ船捜索繋り
写之分当地差出候而英国コンシユルゼネラールニ
取計遣り相可申渡候事

申正月四日 御渡上ル

下ゟ

未開港場所ニ而も猥ニ船掛致候者有之

各国ニ不限右等之儀ハ兼而申上置候通

先般宗対馬守ゟ英吉利船渡来之

節ニ付長崎表ゟ被相渡候旨申達

当未開港場所ニ而猥ニ小船乗組候者

当地在留之英国ミニストルヘ可申達

旨ニ而御渡方申達候処 然ル処外国奉行江

引合候ニ付テハ右ニ[illegible]ニ応シ可申候処 談

判之上通弁官ゟ 引合之 右相手国

規則ニ可有之候 右之件 談判不都合ニ

一時中官ゟ[illegible]書類を[illegible]方

可然哉ニ存 御書類写[illegible]

中山[illegible]

甲子正月

外国奉行

倶之通[illegible]御渡[illegible]

外山[illegible]守

水野[illegible]

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan